

在宅における軽症の痴呆性高齢者に対する 回想法の実際と効果

Evaluative Research of Reminiscence Therapy for Persons with Mild Dementia in Community Bound

研究代表者 岩手県立大学 社会福祉学部 教授 野村 豊子

Iwate Prefectural University Faculty of Social Work
Professor, Toyoko Nomura

軽症の痴呆性高齢者に対する回想法およびライフレビューに関し臨床実践の方法、効果評価、回想法実践を担う人材の育成プログラム、および倫理の検討に焦点を当てた。研究全体は次の6種の諸研究により構成される。すなわち、(1)軽症の痴呆性高齢者に対する諸アプローチの先行文献検討、(2)在宅の痴呆性高齢者に対する訪問ライフレビューの検証、(3)痴呆性高齢者グループホームにおける新規入所者の回想法グループの効果評価、(4)養護老人ホームにおける軽症の痴呆性高齢者への回想法グループの効果評価、(5)介護福祉士養成課程における回想法教育の導入に関する効果評価、(6)回想法・ライフレビューの価値観および倫理の検証、である。臨床実践の方法に関して、構造的ライフレビューとグループ回想法は、グループホームにおける新規入居者の適応を促し、また痴呆性高齢者のライフストーリーの再構成に意義のあることが示された。語られた回想の質的な評価とグループにおける相互交流分析は、回想法とライフレビューの評価方法として有用であった。さらに、回想法を実践する人材として、専門職の公教育の中でのプログラム化の有効性が検証された。最後に、回想法・ライフレビューの倫理原則が提示された。

We conducted an evaluative research of reminiscence therapy, focusing practice framework, evaluation, educational program and ethical issues. The research consisted of six components as follows: (1) literature review of approaches for mild dementia; (2) structured life review for persons with dementia and their family; (3) evaluation of short-term group reminiscence for new residents in group home; (4) evaluation of group reminiscence for care home residents; (5) evaluation of an educational program for professional care workers; (6) ethical considerations of life review therapy. Examination into the practice framework of structural life review and group reminiscence have respectively shown positive effect for the new residents to adapt into the group home as well as to reconstruct one's own life history. Qualitative evaluation of narrative data and interactional

communication analysis were recommended as evaluative tools for reminiscence and life review therapy. The educational program introduced as formal educational frame of professional care worker has provided promising prospect for further development. Through our consideration of values and ethics underlying reminiscence and life review therapy, practice principles of these methods were proposed.

1．研究目的

回想法・ライフレビューは、近年痴呆性高齢者への心理・社会的アプローチとして注目されているが、その臨床と効果評価は、主に中等度から重度の対象者が焦点となってきた。記憶障害や言語障害の状況と重ね合わせると、軽症の痴呆性高齢者への方法として意味を持ちながら、成果が極めて限られている。本研究は、軽症の痴呆性高齢者に対する回想法・ライフレビューの実際的方法を開発し、さらにその効果評価および方法を担う人材の育成プログラムを検証することを目的とする。

2．研究経過

本研究では、次に示す 6 つの諸研究を継続して行ない、軽症の痴呆性高齢者への回想法・ライフレビューに関する臨床と効果を検証した。

第 1 には、軽症の痴呆性高齢者に対する諸アプローチの先行文献検討であり、その成果を痴呆ケア学会で継続的に報告し、石崎賞を受賞した。

第 2 には、在宅の痴呆性高齢者に対する訪問ライフレビューの検証であり、構造的ライフレビューの提唱者である、B .Haight と共同研究を行なった。

第 3 には、痴呆性高齢者グループホームにおける新規入所者の回想法グループの効果評価であり、特に相互交流の変化に着目した。

第 4 には、養護老人ホームにおける軽症の痴呆性高齢者への回想法グループを 2 種行ない、その効果を検証した。

第 5 には、介護福祉士養成課程における回想法教育を 15 時間枠組みで行ない、その効果評価を検証した。

第 6 には、回想法・ライフレビューの価値観および倫理の検証であり、具体的な内容を提示した。

3．研究成果

本研究においては、臨床実践・効果評価・教育プログラム・価値および倫理という、4 つの側面で以下の成果が得られた。

(1) 臨床実践における成果

従来の中重度から重度の痴呆性高齢者への回想法・ライフレビューと異なる実践方法の構築が可能となった。具体的には個人回想法とグループ回想法に分けられる。

個人回想法では、一般的な回想法ではなく、人生の評価を必ず含んだライフレビューが活用され、特に B .Haight の提示する構造的ライフレビューの応用の意義が明らかとなった。また、在宅のアルツハイマー痴呆の方への訪問ライフレビューにおいては、介護家族への個人ライフレビューを同時に行なう枠組みが示された。B .Haight は、英国において、同様の方法を痴呆性高齢者への回想法の権威である Gibson との共同研究で行なっており、日本と米国・英国の 3 国間における比較の基盤が形成された。

グループ回想法では、従来から未開発のグループホームにおける回想法を新設のホームで行ない、参加者の相互交流が回を重ねるごとに展開し、グループホームへの適応が促進されることを確認した。さらに、

回想法グループにおける各入居者の生活歴や人生史の理解は、より個別化したケアを行なう上で欠かせないことが明らかとなった。養護老人ホームにおける痴呆性高齢者への回想法では、相互交流の展開および家族関係や病などライフストーリーの再構築へと向かう人もあり、人生の統合を促すライフレビューの意義がケアにおいても重要であることが示された。参加者の参加満足度は極めて高く、この方法が日常的ケアの中に位置づけられることが望まれた。加えて職員のケアへの意欲の向上に意義があることも示された。

(2) 効果評価研究における成果

個人およびグループ回想法の両者において、その臨床効果を検証する上で、回想の機能分類と語りの内容の分析は、重要性が示されながらも先行文献が限られていた。

今回訪問ライフレビューにおいて、逐語記録の分析を行ない、質的評価の方法としての意義が示された。また、グループ回想法においては、メンバーの相互交流をDimockの分析方法を用い検討した。記憶障害のない一般高齢者へのグループメンバー間の相互交流分析は、回想法研究の中で既にその意義が示されていたが、今回の検証において軽症の痴呆性高齢者のグループ回想法でも活用できることが確認できた。

回想法の効果評価は、高齢者自身の変化だけではなく、職員や家族への変化も含めて多面的に検討されることの重要性が改めて示された。在宅・グループホーム・養護老人ホームという多様な臨床実践の場において、多面的な効果を検討することで臨床実践のより適切なプログラムが開発されることが示された。

(3) 教育プログラム開発における成果

回想法は開かれた技法であるが、その実践では高齢者対人援助の基本に加えて、どのように回想法プログラムを計画し、その

効果を日常のケアに継続できるかが問われる。本研究では特殊な研修だけではなく、人材育成の公教育のカリキュラムの中での展開を試みた。その結果、介護福祉士養成課程1年次の学生の対人認知構造の変化や意欲の向上、対象者理解の深化が示された。

(4) 価値および倫理

回想法・ライフレビューの意義が示されることと同時に、その倫理や具体的な禁忌条項などが明確になる必要がある。先行文献と臨床実践の成果の総合的な検証から、以下の価値観が示された。

第1には、ライフレビューは、今まで全く他の人に公表されなかった回想や他者との密接な関係性について明らかにしてしまうものであり、語られた内容を発表することに対してインフォームドコンセントが必要である。

第2には、公にされる回想の内容は、状況の変化によって形を変えることも多いため、原則的には、語った人の生命がある限り、公表することへの同意をその都度確かめることが望まれる。

第3には、痴呆性高齢者のライフレビューは、記憶障害を背景に行われており、語る人自身は回想の意味を語った当時は理解できていても、症状の進行によって理解できなくなる時点は極めて早く訪れる。語られる関係者の回想は、事実と異なることはもちろん、ある人へのこだわりが前面に強く出て、回想となっている場合も多い。語られた人は、こだわりの対象として詳細なことまで表出されてしまうこともある。それ故に情報を誰がどのように理解するかの検討が欠かせない。

第4には、抑うつ感や外傷体験、ある種の人格構造などにより、過去を振り返ることが強迫的になってしまう人もあり、ライフレビューの方法に準備なく引き込まれてしまうことも起きないとも限らない。慎重

に適用を考えなければならない。

4．今後の課題と発展

臨床実践の方法に関しては、個人回想法における構造的ライフレビューの活用、およびグループ回想法における対象者層のニーズに適した展開が課題となり、その効果評価では、質的評価と量的評価を統合した枠組みが展開される必要がある。研修教育プログラムは、従前の対人援助職教育に新たな視点を導入することが期待される。今後は回想法・ライフレビューの効果評価のみならず、その倫理と禁忌条項の厳密な検討が望まれる。

5．発表論文リスト

1. 野村豊子ほか：地域に在住の中高齢者を対象とした回想法プログラムの試み．日本老年社会科学会・第42回大会，札幌（2000年6月）．
2. 野村豊子：グループ回想法の実際．日本老年社会科学会・第42回大会，札幌（2000年6月）．
3. 回想法・ライフレビュー研究会：回想法ハンドブック Q&A による計画、スキル、効果評価．中央法規出版，（2001年2月）．
4. 野村豊子：痴呆性高齢者の語りとアイデンティティー．文化とこころ 多文化間精神医学研究 vol5-No.1&2 合併号，22-31，（2001年9月）．
5. 伊波和恵，志村ゆず，下山久之ほか：軽症の痴呆性高齢者への心理・社会的ケア（第1報）第2回痴呆ケア学会大会，（2001年10月）．
6. Toyoko Nomura: Evaluative Research on Reminiscence Groups for People With Dementia, in Critical Advances in Reminiscence Work-From Theory to Application-, ed. Barbara K. Haight & Jeffrey Webster, Springer publishing company, 289-299, (2002年6月)．
7. 野村豊子：痴呆の人のライフレビューと家族のライフレビュー．日本痴呆ケア学会誌 1 巻 1 号，9-12，（2002年9月）．
8. 下山久之，野口裕二，野村豊子ほか：痴呆性高齢者ケアにおける語りと回想．日本社会福祉学会第 50 回記念全国大会，（2002年10月）．
9. 野村豊子：痴呆の人から見た視点と evidence based practice 回想法の歴史から学ぶ．第3回日本痴呆ケア学会大会，（2002年11月）．
10. 野村豊子：在宅軽度痴呆性高齢者及び家族への構造的ライフレビュー Haight メソッドの応用的展開．第3回痴呆ケア学会大会，（2002年11月）．
11. 伊藤恵，野村豊子ほか：軽度痴呆性高齢者の語り ナラティブモデルによる質的研究の試み．第3回痴呆ケア学会大会，（2002年11月）．
12. 志村ゆず，伊波和恵，野村豊子ほか：軽症痴呆性高齢者の心理・社会的ケア（第2報）軽症痴呆性高齢者のケアにおける目標と特徴をめぐって．第3回痴呆ケア学会大会，（2002年11月）．
13. 野村豊子：ライフレビューの倫理；近藤均，酒井明夫，中里巧編：生命倫理事典，太陽出版，（2002年12月）．
14. 中村将洋，野村豊子：介護福祉教育課程における回想法を導入した教育プログラムの効果評価，介護福祉教育 No.18 第10巻第1号（2004年7月刊行予定）．